

丞相、白太夫、松王丸 文楽人形ノートより〈摘録〉

大西重孝

〈出典：「演劇界」 昭和29年9月〉

人形浄りの上演形式は“通し”にありといいますが、果して現在の狂言のどれもが、今日の鑑賞にたえうるかというに、必ずしもそうとはいえないようでありませぬ。ところが、「菅原」は立派に通し上演の可能性があります。どの段をとりあげてもよく書けていますし、作曲もよく、その上に人形演出も洗練されています。

しかし、「菅原」が通し上演されるにしても時間の制約があつて、「筆法伝授」や「天拝山」となると時として省略されることがあります。それで茲には「道明寺」「車場」「佐太村」「寺子屋」について述べ、それも相丞、白太夫、松王丸の中心人物を中心に話を進めてゆきます。いずれも先代栄三の所演ノートに拠ることをお含みおき下さい。（中略）

### 車 場

気の重くなるような「道明寺」とうってかわつて「車場」は掛合で、ノリ地の多い華やかな一幕ですが、人形も操法上、能うかぎりの動きを展開してくれます。一般に「車先」と呼ばれる梅王と桜丸との出会いについては特に記すべきものではありません。

「車場」になつて下手から桜丸、梅王の順で駈出して来て、二人が入變つて「車やらぬ」と大手をひろげます。「梅王丸似非笑ひ、フフハハ」と頭をつかつて「いふないふな」と束に極り「見違へもせぬ時平の大臣」と左手をふりかぶつた立身のネジになります。

つづいてチレチン、チレチンと優し味のあるノリの絃について桜丸はコジリ六法をふんで「齊世親王菅相丞讒言によつて」と両の掌をつきだして無念の心をみせ「ハア…」と泣き崩れるところで、梅王が拳でその背を叩きますから、氣をとり直して「御沈落」と極ります。

松王の出は、上手の蔭から「待てう待てう、待てうやい」と声がかかれますので、梅王、桜丸が同時に石投げの見得になります。歌舞伎のように童子格子の両肌を脱いで梅と桜の縫取りのある赤襦袢の二人が揃つてこの見得になるのは珍しい例です。

松王は紫の童子格子の上に白丁を着けていますが、縛り袴に草鞋をはいているのが、歌舞伎と違って見えます。ここでは床は待合せとなつて「つかかけ」の囃子で、長柄の傘をかついで足早やに出ると本手と、船底との境目で、傘を左肩にもたせ、右足をその柄にかけ、右手の脇をおつて顎の下にもつて来て極ります（江戸見得）。「三保神楽」をあしらつた大ノリの絃には構わず、肌ぬぎとなり、松の縫取りのある白襦袢を見せます。「ヤア命知らずのあばれもの」以下のノリの詞は床几に腰をかけたままで「忠義の働きお目にかけん」と立上り「コリヤやい」とマキ足で二人に近づきます。「松王が引きかけたこの車、とめられるなら留めて見よ」と車に手をかけます。松王の後からは杉王

丸、下手からは梅王と桜丸で、押し合いになるのですが、歌舞伎のような豪快な演出は見られません。「命冥加な蛆虫めら」のあとに、時平が浄るり特有の怪奇さをふりまく大笑いあって、下手へ引込んでしまいます。したがって段切の詰寄り三人だけになります。松王は「親父の賀を祝うた後で、梅も桜も落花微塵」と傘をもったままカンヌキと呼ぶ大見得を切ります。「帰るをおのれに習ふか」と、三人が弓張りの手で詰寄って来て、松王は梅王の頭を傘で打って、真中に入替り、立見得。上手の梅王、下手の桜丸がそれぞれ柄頭に手をかけて、画面になることになっています。

### 佐太村

白太夫には役名をそのままの「白太夫」と呼ぶ<sup>ひょうきん</sup>割軽そうな田舎親爺でいて、世渡りの辛さをなめつくしたシンの強さをもった不思議な性根のかしらを用いています。

主家の不幸中の賀の祝だからといって、小餅に茶筌の先で酒塩をうったものを配ったり、三つ子の自慢のはてに、「そちの<sup>かか</sup>嬢も若い程に、産ますならおらにあやかりや」と鼻の先をこすって、肩をすぼめて笑ったりします。祝いの膳に直ってから、まだ姿を見せぬ三人の子供に見立てて、庭先の松梅桜に挨拶をし「親が折角おりての辞儀、辞儀返しがしたうても動かれぬは知れてある、<sup>こゝ</sup>爰で爰で」と松の木、梅の木に向って手で押える真似をして、最後に桜の木には「ここで」とはじめてウレイを見せます。それでもすぐ気をとり直して「嬢達餅を替やいの」といって、尻餅をついて可笑しがる親爺です。

梅王と松王との喧嘩に俵をつかうのは「双蝶々」の「大宝寺町」に於ける長吉、長五郎のタテからの転用ですが、今日ではこちらの方が本家のよう<sup>(ママ)</sup>な<sup>しま</sup>りました。

八重をつれて白太夫が氏神から帰ってくるところからは「訴訟」といっています。千代の贈りものの、茶の頭巾を冠って、両手を腰の後に組んでいると、三つ子の親としての威厳が出ているから不思議です。「折れた桜は見ながらも」で桜の枝の折れているのに気がついて、ハッとして顔をそむけ「誰がしわざぞと咎めもせず」でもう一度、桜の方を見やると、やっぱり折れているので、気をとり直し、キツとなるのが「一物ありと知られたり」です。

梅王、松王から願書が出されるので「願ひがあらば口ではいはいで、ぎつとした此書付、さらばおらもぎつとして」と懐に入れた手を腰骨のところに当てるので、肩が威ったかたちとなり「代官所の格でさばこ」とうたいながら、右からマキ足をして、やがて足で引寄せた座敷<sup>(ママ)</sup>団の上に座ります。親の勘当をうけたいという松王の願いだけ聞入れて追いかえすところで、頭巾は千代に<sup>なげ</sup>投返し、竹箒を松王の肩先にぶちつけます。

梅王の帰ったあとで、白太夫は三方を左脇に抱えて、八重を見やうてウレイを見せ「白太夫は唾を呑込んで」で上手の障子屋体に入ります。

ここから切場の「桜丸切腹」になるのです。木戸をかざらない文楽では、八重は下手の柱に背をもたせかけて桜丸を待つことになります。暖簾口から出る桜丸は黒の着付で、歌舞伎のような肩入れはついていません。

「暫くあつて白太夫」で茶木綿の上をぬいで<sup>うごん</sup>鬱黄の襦袢を見せていますが、同じ色の

手拭で鉢巻をして、結んだ端を額の左右に垂らした人もありました（残念鉢巻という由）。腹切刀をのせた三方を両手にもって「足弱車」でよろよろとなり、立直って桜丸の前に三方を据えます。桜丸の述懐、八重のクドキと進んで、例の御鬮の取直しになりますところで、扇をつかいますが、ここでは省略します。

「潔い倅が切腹、介錯は親がする」と懐中の鉦と撞木を出して見せ、切腹の支度のあいだ始終「南無阿弥陀仏」と唱名をとなえています。いよいよ切腹となって、鉦をうつ手元が狂って床をうつのは「合邦」にもあるテです。桜丸から介錯をうながされて、耳元で鉦を一つ打つのが精一杯のようにすぐガックリとなって、桜丸の背に泣き伏します。

「島へ赴く現世の旅立ち」から旅装束となって出てきますが、下へ横段のはいったたっつけをはいだけて。「冥途のみやげは只念仏」からすぐ屋体を出る人もありますが、そうすると「南無阿弥陀仏」の繰返しのあいだ、段切特有の賑やかな節付となっているため白太夫が踊っているようになります。栄三はこれを嫌って屋体の内で手甲や脚絆の紐を締めていて「南無あみだ笠打被り」ではじめて外に出ました。しかし「西へ行く足」や「無情の桜」の絃にノッて足拍子を踏むことに変りはなく「残る二樹は松王梅王」で松の枝を叩く真似さえしていました。「佐太の社」の柀頭でツカツカと桜丸の死骸のまえに蹲くことになっています。

### 寺子屋

山城少掾の浄るりで深い表現のある源蔵戻りの「色青ざめ」など、腕組みをして下手から出た人形では、正面になるだけの定石を踏むだけです。「内入り悪く子供を見廻し」で下手の入口から入ろうとして、出迎えの子供を見やり「エエ氏より育ちといふに——」といいながら上手の座に直ります。

小太郎を引合される<sup>くだり</sup>件では腕組みのまま考え込んでいたのが、ツト下手に向直り、眉をつかって見守り、上手の秀才と見比べることがあって「ハテ扱てそなたはよい子ぢやなう」と上機嫌になります。それが済んで羽織と袴とをぬぎますが、この時、羽織をまえにおく人はあとに「せまじきものは宮仕へ」でこれを両手に取って芝居をするためです。栄三はそれをやりませんでした。「筆法伝授」で「糊立たぬ麻上下もけふ一日の損料借」といっていますから、拝領の羽織など残っていなかった筈だということです。

山城少掾だと源蔵夫婦のとりやりが特に結構なのですが、今日の人形ではその呼吸をうけてつかつてくれる人もないようです。「鬼になつてと夫婦はつつ立ち」から源蔵は刀を下げて立上ると、下手から戸浪が寄って来て背を合せ「互ひに顔を見合せて」で二人は気がついて、戸浪は下手に分れて手拭を口に咬え、源蔵は居どころのまま、顔をそむけて二人は泣きあげます。「弟子子といへば我子も同然」「さけふに限つて寺入したは」「あの子が業か」「母御の因果か」「報いはちが火の車」と詞が渡って「追付けまはつて来ませう」と戸浪が腰にとりつくのが「妻が歎けば夫も目をすり」源蔵は頭をひねって戸浪を見返って充分のウレイを見せやがて分れます。そして刀をついて両手を重

ねて「せまじきものは宮仕へ」となるのです。

「かかるところへ春藤玄蕃」から、シンミリした空気が一変します。「ヤーレ暫くと松王丸」で駕籠の向うに松王（かしら文七）が立上ります。衣裳は歌舞伎と同じ黒地に雪持の松です。「駕より出ずるも刀を杖」で玄蕃の下手へ重い足を運んで、ツーンとうけの絃と一緒にトンと鑼をついて踏止るのが、やかましい型になっています。

「病中ながら拙者が検分の役」で屋体をふり返り「疎かには」で咳入り「助けて帰るサ術もあること」と頭をつかいます。

寺子改めは、ツメ人形ですから、歌舞伎ほど罪がなくてよろしいが、特に記すことはありません。屋体に入ってから百日鬘の松王があたりを圧して見えるようです。

机文庫の件がすんで「何にもせよ隙とらずが油断のもと」と玄蕃が大紋の袖をはねて立上るので、松王も鑼をついて弱々しく立上ろうとします。と「奥にはぼつたり首討つ音」で、屋体の内で掛声と共にツレが打たれるので、松王は思わず太刀を落とし、山の崩れるように腰を落としあわてて太刀をひろって左肩にもたせかけ、右手の拳で静かに額をうつのは大きな懊悩をかくすためでしょう。

源蔵が首桶を松王の下手に据えて「是非に及ばず菅秀才の御首討ち奉る」というので、それまで額をうちつづけていた松王がギクと面をあげ、ややせき気味に下手に向直り、首桶に両手をかけると、源蔵がその手を払う、松王はトントンと上手斜に身体をひらいて両手を大きく膝につく、玄蕃は床几にかけたまま両手を大小にかけて気色ばみ、源蔵は右手で首桶を押えて、三人同時にツケ入りの見得。

「向ふは曲物」で首桶を引寄せ、蓋をとって懐紙で切首の面を拭い、改めて居住いを直し両手を膝に、上半身をグッとのり出して首を見詰め「ためつすがめつ」左から、右から、そして正面からジッと見据えて「ムウコリヤ菅秀才の首討つたは」と首に向って「紛れなし」と静かに玄蕃を見上げ「相違なし」再び首に向っていい切ります。これから始終玄蕃の方へ引目をして気を許さず「出来した出来したよく討つた」の詞を聞いてはじめて目を戻すのが、栄三の演出でした。

玄蕃は首桶を抱えてサッサッと上手へ帰ってゆきますが「駕にゆられて」で松王はツカツカとそのあとを追い、玄蕃の立去ったあとを見送って充分のウレイを見せ、気をかえて足早やに駕籠の中に姿を消します。

松王の二度目の出は伊達羽織に茶金の野袴、頭巾で面を包んでいます。「尋ねる内に門口より」で頭を解いて「梅は飛び——」の歌を読みながら屋体へ入り「女房悦べ、倅がお役に…」といって、戸外を窺ってから、戸を締め「たつたぞ」とすこしウレイを見せて極ります。

述懐になってからは、太夫の浄ると照応した充分の肚をつかうところですが「につこと笑うて」で思わず「ウウ」とつまり、扇の手で向うを差し、一瞬の間をおいて、上手斜に身体をそむけ、パラリと扇をひらいて顔をかくし、空虚な笑いからだんだん涙まじりになり、やがて扇を落すまで、人形浄るりにして、はじめて味<sup>あじわ</sup>える醍醐味でしょ

う。

白無垢の上下になってからは、千代が駕籠の中の小太郎の死骸を柵に悲しみのふりをくり返しているあいだ、二重で合掌「是非もなや」のあたりから屋体を出て、駕籠に向って合掌、千代をふり返って涙をすすり「劔と死出の山けこへ」で六字の旗をもった千代にからみ「あさき夢見し心地して」上手に入替って、千代の差出す旗を見てギックリとなり「跡オオはアア…」から美しい絃にからんで足拍子を踏みます。「京は故郷と」で上手からゆったりと退ってくると、旗を加籠に垂れかけて戻って来た千代が腰のあたりに寄り添うので、顔を見合せて、上手に身体をそむけて、泣きあげます。千代は下手に分れて、後向けに腰を下した片手つかいの美しいかたちのまま、段切となります。最近文五郎のつかう千代は松王の腰のところに取りつくことに改めたようです。